

文化の本質

文科大學教授文學博士桑木嚴翼氏御講話筆記

文化とは又人文或は文明ともいはれ、殊に文化と人文とは大體同意義に用ひられて居る。近頃では種々の雑誌談話等にも上の語であるから、決して耳新しい言葉ではない。之れで其の文字上の説明は必要では無いが、然し詳しい意義に就いては疑問も出来且曖昧なところもあるやうである。

文化といふ語は生硬な熟字であつて耳慣れぬといふものもあるが、何故に特に此語を用ひたかといふに、それは文明といふ語と區別する爲である。字義から言へば似てゐるが少しく異つた意味に用ひられる。特に獨逸にては文化 Kultur, Culture, と文明 Civilisation, とを區別して使はうとして居る人もある。此場合には所謂文明とは、社會の産業交通機關等種々の物質上の設備が完全して居て我々が安穩に幸福に生活して居る状態即ち物質的方面に發達進歩したる状態をいひ、之に對して精神上の進歩發達を文化といふ。例へば學問が發達するとか藝術が進歩するとか或は宗教が一般に普及するとか、つまり理想的の方面に進歩した状態をいふと獨逸の學者は解釋して居る。またお國自慢の獨逸の學者は「英米人は文明を持つて居る國民だか文化は持たぬ、眞の文化は學問藝術の發達せる獨逸國民が有するのみだ」といつて、此意味に於て文化と文明とを區別した。

私の文化といふのは勿論其の意味で解釋された文化であるが、併し乍ら文化と文明とを一方は物質一方は精神と區別するのは餘りに獨斷的で且つ單純すぎると思ふ。種々の人の使ひ方を見ると、必ずしも文化のみが精神的で文明が物質的とのみはいひ得ないこともある。それで私は文化と文明との區別を或る特別な人の

使つた程嚴重には區別しやうとは思はぬ。故に文明といつても差支へない譯だけれども、廣い意味には適しないやうな恐もあるので文化を以て題目としたのである。

なほ「文化は獨逸のみに限る」といふに對し、反對若しくは嘲弄の語が他國の間に起つたことをつけ加へて置きたい。英佛露等の聯合軍が例へば獨逸を嘲罵する時には獨逸の殘虐な軍事行動を指摘して、「獨逸のクルツール Kultur はこんなものだ」といつて居ることが雑誌等に見える。即ち斯る國(英露佛)では文明といふ語の方が普通につかはれて居ると言はねばならない。ある佛蘭西の雑誌に、「三つのKはいけない。」といふ短詩が載つて居たことがある。三つのKとは、一は Kaiser カイザー 二は Krupp クルップ 即ちクルツブ砲の製造者、三は Kultur で、すべてKのつくものは、悪いとして三つのKをあげて居る所がある。かくて獨逸の古しの有名な哲學者 Kant も又悪いといふことになつた。カントは戰爭には關係が無いのであるが、Kだから悪いとされてゐる。此の如く獨逸人が口癖にする文化といふ語を他國では嘲弄的に用ゐるが、私は之を獨逸で或る人が用ゐるやうに最上のもののみを指すと定めてはしまひ度くない、といつて全くこれを排斥し毛嫌ひしてしまひ度くもない。つまり中庸の意味で使つて行き度いと思ふ。而してかく解釋すれば文化は獨逸專賣のものではなく、英國にも佛國にも、廣く文明國にはみな文化があると考へて話を進めて行き度い。

廣義の文化には普通二通りの見方を設けて居る。一は物質的文化若しくは機械的文化、精神的若しくは理想的的文化を對立せしめるもので、初に云つた獨逸流の區別では、第一は文明で第二は文化である、即ち物質的文化とは衣食住の生活に便を得て居る狀態で(文明)、學問藝術とは精神的文化である、然るに更に——他の分類法によれば、(文明の語を以てもいひ表はされるが)即ち東洋流の文化又文明と西洋流の文化又文明とが通

常對立されて居る。そして多くの人々は、無難作にわけもなく、斯ういふ區別をして居る。最近我々はタゴール氏によつて、屢々此の語を耳にした。氏は屢々此の語を用ひて東洋文明を謳歌し、また、物質文明精神文明といふ語をも使つた。タゴール氏はまた此の二つを結び付けて吾人は東洋の精神的文明を進めねばならぬと結んだ。これは氏のみの説では無く、日本の學者にも同様これを唱へた人が從來から澤山あつた。私は今此の説の批評をするのではない。併し乍ら東洋文明と西洋文明とを、わけなく區別し、また機械的と精神的とに、わけなく之を配布するがこれは決して容易な事ではなく、况んや之に善惡等の評價をするのは困難であるといふことを附加へて置かう。例へば人としても心の働きは精神的で、身體の働きは物質的であるといふことは考へ得られる。勿論兩方一緒にしやうとは考へないが、何が此の物質的、精神的といふことの根本の差別の特徴とする處であるかを考へたならば、これは極めて困難な事になる。心の働きといふ中でも複雜な精神作用は(立派な藝術を作る如き)所謂物質の働き(石と石とぶつかり合ふ如き)とは大變違ふ。勿論これを一緒にするものは無いが、併しこれを簡単な處まで持つて來ると、何處に其差違があるのか、分らなくなれば、其働きをなし得ない。單純な感覺感情に就いては大體それを示す事が出来る。高尚な精神作用に對して脳髄は如何なる作用をするか、神經がどう働くかといふことについては調べは出來ないが、大體は推し量られるといつて、其の心理學者は精神的現象と物質的現象と結び付けて考へて居る。また或人は、「精神は物質なり。」と極端に思ひ切つて言つたが、其れは兎に角區別して考へるのは難しい様である。此意味に於いて靈と肉とを區別した時代の考は取る事は出來ぬ。かく理論は根本的に於いて「精神が盡く物質と同一である」と

いふ極端な考へは取らぬまでも全く無關係とは思はれぬ。従つて所謂精神的の事柄と物質上の事柄との區別の如きことも猶更云ひ得ぬ。精神的物質的事に就いても相互の關係がある。成程、機械が發明され物質が豊富になつても宗教や藝術が盛んになるものではないが、然し宗教や藝術が物質と全然無關係だと考へてはいけない。如何に天才があつても適當に物質上の準備が無ければ充分に其能力を伸ばす事は出來無い。昔から貧賤に安じて勉強した人或は眞に偉い人が苦しい境遇の中に在つた事等を考へて見ると物質と精神との間に關係の生活とは一致するものでは無いやうにも思はれるが、兩者は互に相俟つのも亦事實である。また反対の場合即ち物質上に發達すると精神上に墮落するといふ時もあるがこれも亦反て所謂物質と精神との間に關係のあることを示すものである。此の二つを離して考へるのは曖昧になるのみである。更に例をあげて見ると、繪を畫くにしても、繪具や絹がよい程よい繪が畫ける。一方に天才がなければ、いくら繪具や何かあつても、いけない譯であるが、一方天才がいくらあつても用具が悪ければ、よいものは畫かれぬ。文科の學問は物質と比較的遠ざかるやうであるが、それも或度迄である。物質上の生活即ち所謂文明と、精神上の生活即ち狹義の文化とが全然無關係であるかの如く考へるのは不可である。而して精神上の文化其のものゝ中に物質上の文化があるとしたやうに物質上の文化其のものゝ中にも精神上の文化がなければならぬ。工業上の大發明をなす人は精神的に偉い人でなければならぬ、其の學問に達せるのみならず意志が鞏固で知見が鋭敏であるとしなければ工業上の大發展も何も出來ない。即ち物質の中にも精神がは入らねばならぬので、兩方は區別し難いのである。機械的文化理想的文化といふことも同様に説明出来るごおもふ。

然し所謂精神的理想的文明といふのは普通の物質的進歩にて説明し得ない特殊の何かの力を有して居るの

であつて、只心の働きを以て精神的とするのではない、心の中最も發達せる高尚なる部分が働く爲に精神的といへるのであるといふやうに考へられる。これは私もみどめる處であるが、斯うなると、別の問題で、普通の意味の精神的とはいへない。要するに私は普通の意味に於ては物質的文明と精神的文明とは區別し難いといふのである。同じ意味に於いて、東洋文明と西洋文明との區別もつき難いのである。例へば東洋と西洋と分けるにしても、歐洲より東を東方といひ、西を西方といひ、別に洋に境は無くとも、東の方の國は東洋であつて、土耳古や亞利比亞や小亞細亞等は皆東洋である様にも見えるが、然し世界文明の系統上私の記憶によれば、西洋の方に入れられて居るやうに思ふ。それで今日東洋文明とは支那を中心とし其の附近をさして東洋といふ。時には、印度迄を含めて東洋といふ。印度は人種からいへばアリアン人種で、其の或種の文化系統は波斯希臘に類似し西洋の文明系統に屬して居る。故に支那と印度とを比較すれば東洋といつても、隨分色彩が違つて居る。然しこれ等を包括して東洋といつて居る。

尤も西洋といふ語も曖昧で、獨逸と佛蘭西とは違ふ處も有がまた同じ處もある。印度と支那との間には是程の類似も全く見出されぬ。要するに東洋の概念は餘り明かではない。只日本に近い處を東洋といつて居る迄で、波斯や土耳古は全然度外視して居る。しかも或る場合には東洋と見或る場合には、西洋文明の淵源だとも云つて居る。西洋と東洋との區別さへ此の通りである。まして西洋文明と東洋文明との特質となると猶更分け難くなるのである。また、印度を東洋に入れるべきかと云ふに、これを東洋に入れると、東洋の文明と西洋の文明とは似通つて来る、また印度を西洋に入れると東洋は狭くなるが、そうすると東洋といふのは日本と支那だけ位になつてしまふ。且つ又西洋の文明は物質的器械的で東洋の文明は精神的で高尚なものだ

としてしまふのは淺薄である。今日米國あたりから日本に來る人を見ると物質的機械的だといふ感じがせぬでもない。又西洋の發達せる都市の有様を見ても同様な感じが起る。また日本や支那の田舎にいつて見ると精神的即ち非文明的らしく見えるが、これは凡て貧乏人が賢者金持は愚かだといふ論理と同様である。西洋人にも哲學者やうに精神的な人もあるし、東洋には古來消極的に悟道計り考へて居た人もあつたであらうがこのやうな人許りでは固より今日社會が永續する筈のものではない。また東洋人には物質的の人が無いといふのは輕蔑した見方であつて、或る特種の人を眼中に置いて考へるのは不十分なものである。況してそれによつて文化の性質を定めるなどといふのは一層不十分である、故に東洋の文明、西洋の文明を歴史上の語として使ふのはよいが深い意味があるやうに考へて用ゐるのは宜しくない、それで自分は上に述べたやうな區別は誤つて居ると思ふ。即ち文化には東洋的も西洋的もない、物質的も精神的もない、文化は只一つあるべき筈のもので、文化の只一つの本質のあらはれて居るのが文化である。其の本質を捉へないで自然にあられた處を以て區別するのは悪いことだと考へる。

そこで進んで文化の本質を考へるとなるが、其れには先づ文化は何に對するかと考ふべきである。

すべて物を考へるにはそれと著しく反対のものを見るとよく分る。例へば白と黒との如く、善と惡との如くこれ等二つを對照する事によつて其の一方は益々明かになる。さて文化に相對するものは何か、といふにそれは自然である。自然是有的の儘の意味で物質の意では無い。文化は自然にあるものでは無くて自然物に人間が手を加へて出來たものである。元來英語の *Culture* は「耕す」といふ意味で、即ち土地の儘にしてゐるのでは無くて百姓が鍬をいれて富饒な土地にすることなのである。文化もこれと同じ意義で、人間が天然に手を加へて使用の目的に供する様にするのであつて、古くから文明に對しても同様な解釋が出て居た。要するに文化の根本は此れ計りである。さて茲に問題とするのは自然に手を加へる人である。人とは何をさして云ふか、從來よく文明の定義に「人が自然を征服する事である」といつたが、それは人に對する解釋が不十分であった。それで、つひ文明とは所謂物質文明の意味といふやうに考へてしまつたのではあるまいかと思はれる。人といふ事を朝起きて食べて仕事をして夜寝る人即ち單純な衣食住の生活をして居る人と解釋して居る固より此等の人々によつて出來る文化は全く衣食住の用に供せられる計りで、真正の意味の學問や藝術は無い。野蠻人や未開人の日常生活は即ちそれである。若し人間が實用上の目的のみを以て生活するものと解釋したならば文化は左程高い深い意味を持つ事は出來ぬ。所謂高尚な精神的理想的文化には猶一層深い意味があるので、夫れ以上に自然を征服する人は、より以上の人でなければならぬ。で、文化の意味は人の見方によつて、夫れく異つて来る。即ち人を高く見るか低く見るかに依つてある。我々は高い意味に於ける人を探さねばならぬ。^是さて高い意味の人とは何か。それは只自然の儘に外界の刺戟をうけて生活する人では無くて、自分が自然を自由に變へることの出來る人である。併し乍ら自然の方が強い時には駄目であるが、そんな時には腕力で行かねば智力で行くとか結局人間は自然を如何にかすることが出來ると假定して進んで行く。換言すれば人が意志の自由を持つて居るといふ事を第一に假定して自然に對するのであるが、さて其の意志の自由といふ事を如何に使ふか、只亂暴に使ふと、第一の意味での人間と同じことになる。故に自由の争は或一定の方向を定めてそれに向つて自由に進んで行くことである、一定の方向に進んで行くといふこと、これは自由では無いやうに考へるかも知れないが、自分自らが方向を定めてそれに向つて進んで行くのだから

ら矢張り自由である、浮草のあちらこちらに漂ふやうなのは決して自由なのでは無い。即ち自由には目的がある。かかる仕事は人がなし得ると考へて茲に人間の意志を定めやうとする。目的と意志の自由が一致すればこれが其の特色でこの特色を以て自然を變へて行く事に依つて文化が出来るのである。故に意志の自由なく目的無き人の集合した時では未だ文化の本質は表はれない。目的を立てゝそれに向ふ事に由つて我々は、目的に對して行爲の價値を評價する事が出来る。結局目的は最高の價値、絕對の價値であると云ひ得る。吾人の生活に絶對的價値があると信じて、これに向ふやうに意志を向け、そして自然を改造して行く處に文化がある。故に他の語でいへば、文化とは人間の生活に於いて絶對價値を有する狀態である。さて絶對價値とは何か、口ではいふがこれは容易に定める事は出來難い。吾人が日常に有するものは皆相對的であるが、其の相對的價値の結局は絶對的價値であると考へられる。其の價値を目當てとする行爲の集りが即ち文化である。然し其の文化は決して完全に現はれて居るものではない、何處の國へ行つても見當らない、たゞ比較的に之に接近する國土と時代とがあり得るばかりである。若しそれがあれば其の社會國家やその時代は完全圓満な國家社會時代であつて一步も進む事は出來無い、地球のある限り其の儘の狀態である然しこれは理想であつて現實には決してそんなものはない。然し事實に於ては不完全なもの計り見て居るが、不完全なものが表はれて居るから、もう一つ絶對價値のもの完全圓満なるものを考へる事が出來るのであつて、それを想像して我々は進むのである。これを根柢に於いて我々は日常の生活をするのである。然る後に文化は考へられる。所が如何にかく言つて見ても實際にそれが無いものならば、空想にすぎないのだが、極く卑近な例でいへば「人は萬物の靈長なり」といふ、これは人間が絶對的價値があるといふ意味であるが、近頃は、これに反対する

説が起り、人は寧ろ動物に近いもので猿の類から進化したもので人は萬物の靈長なりとはそのむかし宗教の教から來たもので人間のすることには誤があつて寧ろ動物の方に優れたものがあるといふ。斯うなつて來ると益々曖昧になつて来るやうに考へられる。

私は「人は萬物の靈長なり」といふことを昔の宗教家がいつたやうな意味には取らないが、また動物學者のいふやうに人は猿の類から進化したもので、よし元は同じであつても現在に於ては違つて居るのであるから、其處に深い哲理はあるが、日常の語として人は猿と同じものだとはいはれぬ。故に「人は萬物の靈長なり」とまでいはなくとも、人には他のものとは優れた特質、優れた才能があると見ればよい。「人は萬物の靈長なり」といふことは事實として其處まで定めることは出來ないけれども、そういうふ意味で自覺して居る事は差支へないと考へる。實際斯る意義をもたない人があるが、これは私がいふ處の人では無い。所謂醉生夢死して居る人は、人らしいが事實人としての資格が欠けて居る。斯る人は人間扱ひにしない許りだが、人の仲間入りをして居るものは、「人は萬物の靈長なり」といふ意義を持つて居る。此意味に於いて昔の諺を復活せしむべきであつて絶對的價値の文化は「人」、英語でいへば A Man 或は Men でなくして The Man であり Person でありまた Personality を有する人の集合より出来るものである。人格は人たる本質をさすもので、人としては、最も重要な相本的のものである。人格を種々の意味に解釋して人の值打を下げ様とするものもあるけれども、普通には其の人格を根柢として種々の文化が分れて作られるを見るものが多い。

以上即ち人格的文化は主に抽象的の語で一種の希望であり理想であつて實際のものとはなつて居ないが、之れに肉をつけるものは、様々の時代、國土に於ける自然の發達及其國土に棲息する人類の生活等であつて、此の方面よりせば文化は自ら、違つて來る筈のもので、これを一様にしやうとするのは、無理なことであつ

ある。また此の差別を認むるが故に文化は獨逸專賣のものでもなければ羅甸系統の國家のみのものでもなく、また東洋計りが優秀な文化を持つてゐるとも限らぬのである。此の様に文化に差違ある爲に其の間に、争の起るのは、事實上あることである。そして互に他の文化を理解しないで、自分のもの計りがよいと思ひ込む結果遂には戦争等にもなる。そして、文化の方面に二つあるとしたり、或は精神的、物質的としたり、或は英國の文化、獨逸の文化とする如きは、文化の一方面ではあるが根柢ではない。根底になるものは、文化の絶對的方面が決して動くこと無く、即ちこれは人格から來た絶對的價値で何處の國でも同様で、しかも何國にも妥當なるべきもので、それに達せんが爲に諸國の異なる文化があるのである。即ち根底は只一つあるのみで、表面が變るのである。變るが故に何時迄も一定の文化内容を保有して居るのは悪い。變らぬ處がある故に保有すべし、といふ人があるが、不動の文化は過去にあるのでは無くて、過去にも、未來にも、常にあるのである。故に或る一時代に拘泥する文化は取るべきものではない。或時代に或特別な形式を取つて顯れた文化の本質は他の時代には又之と異なつた形式をとるべきものであるからである。それで何處までいつても満足は無いから、極めて頼りない様ではあるが、其處に生きた生活があつて、學問をすゝめ教育を盛んにして行くことが出来るので、もし文化の本質内容共に固定せるものであつたならば、人々の折角の骨折も無意味なものになつてしまふ。所謂物質的發達も斯る方面より見て意義があるのであつて、只時々の必要をなす爲のみのものであつたならば、衣食住に追はれて行く人の生活と何等の撰ぶ處が無い。

大體文化的意味を以上のやうに考へて、其處に我々が學問をし教育をする根底があると思つてお話したのであるが、ひゞく抽象的になつたけれども、それに肉をつけるのは諸君の知識經驗に俟つとして、私は只骨格だけを話したのである。(了)

歐州文明と個人主義

保 科 孝 一

【一】

日本の言語と歐羅巴の言語とを比較して、その間に多少類似したところがあるから、日本語はウラルアルタイ語族に屬するものでなくして、アリアン語と系統を同じうするものである。したがつて日本人は蒙古人種でなくしてアリヤン人種であると得意がつて居る人があります。しかしたゞひ言語に類似があるにもせよ、これによつてこれを話す國民が同一の人種に屬するものであると斷言することの出來ないのは、苟も言語學の一端を修めたものが、皆首肯するところで御座います。况んや類似の證明が全く非學術的であるとすれば、かかる斷定は一顧の價値もないものであります。言語の比較的研究と申すことはなか／＼困難な事業でございまして、素人の片手間に出来るもので御座いません。それにも拘らず日本語はアリヤン語系に屬するものであるから、日本人はアリヤン人種で蒙古人種でないといふやうなことをしきりに主張して居る人があるのは、私どもには甚だ奇妙に感じられます。なぜこの人達は日本人が蒙古人種でなくしてアリヤン人種であると言ひたがるのでせう。おそらくアリヤン人種が蒙古人種に比して非常に優等であると信じて、若し日本人がアリヤン人種であるとする、大に肩身が廣いやうに感じられるといふのではありますまいか。アリヤン人種が事實蒙古人種よりも優等な人種であるとしたら、さう感じても宜いか知れませんが、さういふ證